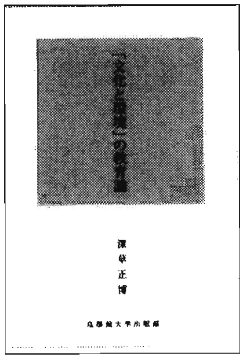
書　評



深草正博　『「文化と環境」の教育論』
（皇學館大学出版部　2009年3月刊）
ISBN978-4-87644-155-6 C3037

本書は，皇學館大学教授深草正博氏が愛知教育大学附属高校教諭時代も含め様々な出版物に寄稿された教育論をまとめたものである。氏の教育に関する考えを多様な角度から知ることができる。

本書は，大きく2部構成でまとめられ，第一部には論攷を第二部には書評や事典項目などの短文をまとめている。氏によれば，第二部こそ本書をまとめる強い動機であるという。テーマを与えられて書いた著作は，一見そのテーマを与えた編集者などの観点に沿ったもので著者の本質的な思考とは違い，軽く書いたもののように思われがちであり，著者も往々にして締め切りに追われて急いで書く場合もある。しかし，だからこそ，つまり頼まれて書くからこそ，日頃の研究を通して見ている世の中つまり世界観が気負わずに出てくるものである。研究論文が演説原稿とすれば，与えられて書く文章は，インタビューつまり対話の中での答えのように表情豊かに伝えられる著者の本音の言葉といえる。

その第二部の（三）「「三つの偏見」から自由になっていること」は，平成7年に『社会科教育』（明治図書）に載せられたものである。深草氏は，「欧米が最も優れているという偏見」「自国が中心という偏見」「今が最高という偏見」の3つの偏見から自由になることが歴史教育の課題であるという。氏の教育研究の基本がこれなのだと改めて確認できる指摘である。氏は，本書のタイトルにも含めているように「環境」という視点から人類の歴史を描くという研究を続けられ，『環境世界史序説』（国書刊行会2001）にまとめた業績を持っている。氏のこの歴史は旧来の世界史とは全く違う視点から歴史を描く先駆的な試みである。それが，この3つの偏見から自由な「歴史」をめざした氏の一つの答えといえる。「環境」は欧米とか自国といった近代の国民国家の視点を超えて地球規模で人類に影響を与える。そしてそれは，今が最高と考えることを否定するかのように悪化している部分もある。「「三つの偏見」から自由になっていること」は，「環境」という視点から歴史を描くことを地道に着実におこなってきた深草氏の本音ともいえる考えであろう。

ところで，本書の最終節は，「マジックと教育」である。氏は，マジックを得意とされその腕前はプロ級である。氏は，マジックの本質は，人間の持つ固定観念を巧みに利用しそれをひっくり返すことだという。氏は，授業の本質は，マジックと同じで子どもの持つ固定観念を突き崩すことであり，どちらもタネ（ネタ）が大切という。これも，氏の本音の中でも最も重要な授業論なのだと感じた。「環境世界史」そして本書もマジックに通じるところがある。氏は難しい内容を読みやすくわかりやすく書かれるが，本書は，その文才を遺憾なく発揮された数々の論攷を一気に読むことのできる貴重な一書といえよう。

（愛知教育大学　社会科教育講座　土屋武志）